

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
 大学院生研究
 2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	日本文学 専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科日本文学専攻 博士課程後期課程3年	後藤 隆基 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学部教授	藤井 淑禎 印	
自然・人文 ・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 名
研究課題名	明治30年代演劇における作家と俳優の研究 —高安月郊と川上音二郎を視座として—		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・日本文学専攻 博士課程後期課程3年	後藤 隆基	
研究期間	2011 年度		
研究経費	200 千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

明治30年代の近代日本演劇について、とくに〈作家と俳優の関係〉という側面から考察を行うため、高安月郊と川上音二郎を対象とした。従来近代文学・演劇研究において高安月郊という作家はさほど重要視されてこなかったきらいがある。しかし、西洋文学受容の観点や、京都演劇改良会(明治35~36年)の活動での支柱的役割に鑑みれば、近代における上方演劇を考える上でも重要な存在と言えよう。そして月郊が最初に東京で自作の上演を実現したのが川上音二郎との共同作業『江戸城明渡』(明治36年)であった。本研究は、高安月郊と川上音二郎を視座に据え、明治30年代における演劇生成のプロセスを検証し、また従来東京中心に偏重しがちだった近代演劇研究を京都・大阪という〈場〉から再考する試みである。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[近代日本演劇] [近代日本文学] [近代日本文化]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

明治 30 年代半ばの京都に演劇改良のための組織がつくられ、独自の活動をしていたことは、あまり知られていない。京都演劇改良会(以下、適宜「改良会」と略記)については少なからず先学の指摘があったものの個別の通史的記述にとどまり、詳細な考察はされておらず、また事実関係の誤りや不備も散見される。それらを整理し、まとめた形の研究として初めて問題提起したのが、小櫃万津男『『京都演劇改良会』の研究』(『日本演劇学会紀要』第 18 号、昭和 54 年 10 月)である。まずは小櫃論文によって確定された公演活動の「完全な記録」を引く。

○京都演劇改良会発足……明治三十五年四月二十六日、先斗町歌舞練場。

○第一回公演、三十五年九月十七日初日、九月二十八日千秋楽。京都四条南座、(一)高安月郊作「月照」(二)高安月郊翻案「闇と光」(原作、シェークスピア作「リア王」)

○第二回公演、三十五年十一月二十九日初日、十二月十七日千秋楽。京都新京極夷谷座、(一)高安月郊作「大塩平八郎」(二)島華水翻案「修紫」(原作、モリエール作「タルチュフ」)

○第三回公演、三十六年四月一日初日、四月十二日千秋楽。京都四条南座、「十年の恨」ステヴンソン作「夜光の珠」

明治 35 年 4 月、五条警察署長の井田淳警視を後ろ盾として京都演劇改良会は発会した。会長に京都電気鉄道会社の創設者高木文平を迎え、京都帝国大学図書館長で英文学者の島華水(文次郎)らが顧問に参画し、会員には静岡小次郎、福井茂兵衛といった新俳優や、松竹合名会社の白井松次郎、大谷竹次郎兄弟も名前を列ねている。先斗町歌舞練場で開かれた発会式には京都市長や市議会会長も顔を揃えたという。同年 9 月に第 1 回公演を実現すると、高安月郊の新脚本が好評裡に受け止められ、11 月には第 2 回公演が舞台にかけられる。しかし、翌年 4 月に第 3 回公演をおこなうものの、これがうまくいかず、実際的な公演活動の停滞をきっかけに会自体も自然消滅してしまった。

小櫃は、上記の事実関係を明らかにし、同時代資料に拠って発会から終焉にいたる動向を論じている。殊に島華水や高安月郊が稽古場に通って指導をおこなった点に着目し、その意義を「明治演劇史上、初めて旧歌舞伎界と全く断絶した所で、京大教官、文人等の知識階級の作・並びに演出と言う直接的協力のもとに行われた文芸的演劇公演」であり、坪内逍遙の文芸協会や小山内薫の自由劇場に先駆けた「実質的な新劇の発足」と総括していた。

本研究では、小櫃万津男『『京都演劇改良会』の研究』の成果を引き継ぎ、高安月郊と京都演劇改良会の関係について論じた。とくに小櫃論文で詳細不明とされ、その他の先行研究が看過してきた第 3 回公演について考察した。京都演劇改良会の運動が頓挫し、持続し得なかった(失敗)の原因を究明することで、演劇の近代化を阻んだ壁の実体を明らかにし、京都の演劇改良運動の支柱となった高安月郊の再評価を試みたものである。

第 3 回公演に関する同時代の言及は 1 本の劇評、しかも『十年の恨』の評(松軒「南座の改良演劇」『京都日出新聞』明治 36 年 4 月 10 日)が掲載されただけである。京都演劇改良会に関する先行研究はあるものの、第 3 回改良演劇にふれた記述はきわめて少なく、小櫃万津男も、前掲松軒評を紹介しながら「資料不足の為全貌を明らかにし得ないが、何れにしても改良公演としては三回の内最も不徹底で、尻すぼみの形になったことは確かな様である。事実、京都演劇改良会の改良公演はこの三回を以て中止の形となった」と述べるにとどまる。

そこで、同時代の紙誌を改めて精査し、第 3 回公演が実現されるまでの経過を中心に、上演演目についても検討を加えた。第 2 回から第 3 回公演までには、明治 36 年 1 月の弁天座興行を挟んで、約 4 か月の空白がある。この間、改良会の経済的難航が報じられており、興行面の不安も窺える。第 3 回公演の告知はされるものの、そのたびに日延べされ、初日が開くのは 4 月。京都救済院に袴を贈り、それを孤児らに穿かせて場内で筋書を買らせ、売上を寄付するという慈善興行的性格を加味させたり、幕間時間の短縮が特記されるばかりで、演劇内容に関する新しい工夫は伝えられていない。

一連の動向を見わたして最も注目すべきは、上演演目の変更をめぐる紆余曲折である。第 3 回公演で『十年の恨』と『夜光の珠』の 2 本が上演されたことは前述したが、第 2 回公演のおこなわれた 12 月、そして翌年 1 月の大阪遠征から第 3 回公演が開幕する 4 月までの間には、端倪すべからざる演目の交代劇があった。先行研究で論及されていないことはもちろん諸文献でも未紹介のため、参考として『京都日出新聞』の芸能欄「楽屋風呂」にある関連記事を日付順に列べておこう。なお各文末の括弧内は掲載日をしめす。

①京都演劇改良会の高木会長、島、高安両顧問、井田争議員外福井茂兵衛ら一昨日高木氏の宅に会して何か会議する処あったと尚福井の第三回改良演劇は来る一月下旬新京極で開演する事に仕打大谷、白井に交渉済みとなつて居り狂言は仏国ユーゴー氏の作を高安氏が翻案して「浮世の責」と題し五幕十五場に仕組むさうだ(明治 36 年 1 月 22 日)

②山口一座は来る廿五日頃に打上げ川音一座興行の準備に着手する筈で川音の一週間興行を終れば其跡釜は福井一座の第三回改良演劇を開場する事に相談纏り芸題は一番目ヴキクトル、ユーゴー氏の原作を例の高安月郊子が翻案して「浮世の責」五幕と二番目は島華水子が二幕物を書くとかいふ事(同年 2 月 22 日)

③芸題は一番目は高安子の書卸し物六幕、二番目は島華水子の翻案喜劇二幕といふ事(同年 3 月 20 日)

④芸題は一番目「大丈夫」六幕、二番目は「夜光玉」といふ翻案物に極つたと(同年 3 月 25 日)

⑤一番目を「十年の恨」といふのに改題したと(同年 3 月 26 日)

研究成果の概要 つづき

⑥一番目「十年の恨」六幕、二番目は「夜光の珠」三幕にて明後一日初日開場の由(同年3月30日)

さしあたり問題にしたいのは、第3回公演における高安月郊の関与である。前2回の京都演劇改良会の公演は月郊の脚本を軸に構成されてきた。これまでの研究では第3回公演に月郊の名は記載されていないが、それは結果としての上演記録のみを見ているからで、掲出した新聞記事に注意を向ければ、月郊が参加を予定していたことは明らかだろう。しかも直前までは彼の作品が上演されるはずだったのだ。

この事実を裏書きする傍証として、当時月郊が内田魯庵に宛てた書簡がある(本間久雄『明治大正文学資料 真蹟図録』所収、講談社、昭和52年)。

拙著平八郎に付て御賞賛、不堪懺愧候。旧冬より京阪の劇場に上し候て、稍實際上の経験を得申候。次回は祇園の百合と内定致し候。沙翁のリヤアも処々に演じ候が、原本其儘の処は俳優もだれ、見物も喜ばず。原意のみを取て随意に案したる処を喜び候は是非もなき事に候。追々イブセン、シルレル、ユゴーなどにも及はんと存居候。[…]

文中に「旧冬より京阪の劇場に上し候て云々」とあるのが京都演劇改良会のことをさす。また「次回は祇園の百合と内定致し候」とは、後年『月郊脚本集』(私家版、大正5年)に収録された「祇園の百合」のことだろう。本間久雄は改良会について第1回公演の概要を解説しながらも会自体には論及せず、この「次回」との関係も看過している。が、先の『京都日出新聞』の記事と照し合せることで、新たな意味を見出すことができるのである。書簡の消印は「明治三十六年三月十三日」だから、記事③の直前になる。ということは、③に見える「高安子の書卸し物六幕」は「祇園の百合」をさすのだろうか。しかし『月郊脚本集』所収の「祇園の百合」は2幕4場構成である。執筆時には6幕構成だったのが、活字化までに改訂されたのか。明治36年3月の時点では脱稿しておらず、企画のみ進められていたのか。あるいは③の時点ですでに別の作品が用意されていたのかもしれない——などいくつかの可能性が考えられるが断定できる証拠はない。ここでは、結果的に「祇園の百合」は上演されなかったものの、直前まで改良会の「次回」作品として月郊の脚本が候補に挙がっていた、という点を確認することとどめたい。また前掲記事の流れを追うかぎりでは『大丈夫』(→『十年の恨』)を月郊の「書卸し物」と見ることもできそうだが、『大丈夫』は同年1月に大阪で上演された、間無声なる新派作者の脚本であることが、今回略筋の比較調査によって判明した。つまり『十年の恨』は既製作品の焼き直しだったわけで、脚本刷新を旨として出発した改良会は、三度目の興行がおこなわれるに至って改良演劇としての意味をほとんど失っていたのだろう。なお、当初予定された『浮世の責』とは、ヴィクトル・ユゴー作『レ・ミゼラブル』の翻案脚本である。従来指摘されてこなかったが、近代日本における西洋文学受容を考える上でも重要な作品であり、このとき上演が叶えば『レ・ミゼラブル』の本邦初演となるはずだったことも付記しておく。

後年月郊は「一座が無人と成た時なので甚しい苦戦、それで京都に於ける改良会は自然消滅の形になつた」(「福井茂兵衛と京都演劇改良会」『演芸画報』昭和5年4月)と回想している。また堂本彌太郎が「脚本をそのまま、一言一句も変更せずに出演することにしたので、動もすると俳優に脱退者を出し、結局興行的にも恵まれず、遂には福井の一人舞台」(『上方演劇史』春陽堂、昭和19年)になったと指摘する、俳優の不在という問題があった。第3回公演には、それまで改良会を支えてきた俳優陣の名前が、座長である福井茂兵衛のほかは誰も見当たらない。改良運動に意欲的に取り組み、その奮闘ぶりが折にふれて喧伝された福井はとまれ、作者陣と多くの俳優との間では改良演劇をめぐる意識にズレが生じていたのではないかと推察される。

京都演劇改良会がめざした最大の意義は「脚本は文学諸大家の検閲を乞ひ俳優は務めて言文一致を要する事」という施策に尽きる。俳優が要求された舞台上の「言文一致」とは、俳優の「言」(=身体行為)を作者の「文」(=文字テキスト)に「一致」させることであり、どんな台詞であれ台本に書かれたとおり、一切変更を加えずに語ることだ。さらに書き手が作品を提供するばかりでなく稽古段階から指導者的に関わった。それは演者が抱く自己表現の欲望を他者に束縛させることでもあっただろう。舞台の主導権の俳優から作者(演出者)への移行は演劇の近代化をめぐる一要件とされるが、俳優中心のヒエラルキーは簡単に改善できるものではなく、それに対する俳優の反発が起こってもおかしくない。また指導する側に立った作者たちは演劇現場に携わったことのない局外者であり、たとえ彼らが文学の立場から(近代)にふれ得ていたとしても、実際の演出・演技論を知っていたかは疑問だ。作家や後援者、一部の俳優が改良を謳ったところで、実際に舞台に立つ多数の俳優たちの心性を無視しては舞台そのものが成立しえない。第3回公演の「不徹底」は、改良演劇という理想と、演劇現場の現実との齟齬が顕在化したことが直接の原因だったと考えられる。

京都演劇改良会は終息してしまうが、これを契機として高安月郊は劇作家としての道を歩きだす。また、海外巡業から帰国し、新たな演劇表現を模索していた川上音二郎が、月郊に助言を求めるとして京都を訪ねるのも、京都演劇改良会が順調に動いていた明治36年初頭のこと。2人の出会いから、近代演劇の次なる扉が開くのである。

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ①後藤隆基「高安月郊と京都演劇改良会—第三回改良演劇と、その挫折—」
『演劇学論集』53, 2011年, pp. 25-42
- ①後藤隆基「大正期における『歌舞伎新報』の復活」
『大衆文化』6, 2011年, pp. 43-56
- ①後藤隆基「『露宮の夢』(承前)—唱歌の歌舞伎化にみる新表現の可能性—」
『立教大学日本文学』107, 2012年, pp. 101-117
- ①後藤隆基「俵藤丈夫編集長下の『歌舞伎新報』」
『大衆文化』7, 2012年, pp. 1-16 (※4月刊行予定)